

三鷹市教育・子育て研究所
国立天文台周辺まちづくりにおける義務教育学校に関する研究会
第8回 次第

日時：2月20日（木）

午前10時から正午まで

場所：三鷹ネットワーク大学

1. 国立天文台周辺まちづくりにおける義務教育学校に関する研究会報告書案について
・意見交換

○配付資料

資料1：「国立天文台周辺まちづくりにおける義務教育学校に関する研究会報告書案

三鷹教育・子育て研究所
国立天文台周辺まちづくりにおける義務教育学校に関する研究会
(第8回議事録)

日 時 令和7年2月20日(木) 午前10時～12時
会 場 三鷹ネットワーク大学
出席者 天笠 茂(座長)、青木 睦、倉田 清子、二宮 淳、富士道 正尋
アドバイザー 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室室長代理
本岡 寛子
三鷹教育・子育て研究所所長 貝ノ瀬 滋
事務局 松永 透教育長ほか三鷹市教育委員会事務局、三鷹教育・子育て研究所事務局(NPO 法人
三鷹ネットワーク大学推進機構)、PwC コンサルティング合同会社

〈議事録〉敬称略

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

議事録(敬称略)

1. 国立天文台周辺まちづくりにおける義務教育学校に関する研究会報告書案について
事務局より説明

意見交換

(全体構成・「はじめに」に関するコメント)

- 天笠座長：では、全体の構成や、「はじめに」の部分について意見ををお願いしたい。その後、各章ごとに意見を聞き、最後に全体を通しての意見交換を行う想定。
 - 貝ノ瀬所長：全体的に「てにをは」を含め見直していただきたい。1文が長いことから、1文あたり2～3行程度に修正いただき、読みやすい文章を心がけていただきたい。
 - 天笠座長：前回、この取組自体が小・中一貫教育のメンテナンスとなるものと言及したことから、事務局にメンテナンスに係る内容を追加いただいている。また、メンテナンスという文言をそのまま使用すると、建物等のメンテナンスとして認識されかねないため、文言修正も行っている。

(「第1 義務教育学校とは何か」に関するコメント)

- 天笠座長：第 1 章についてコメントがあればご発言いただきたい。まず P.4 では、第 1 節「義務教育学校の制度概要」と第 2 節「三鷹市の『学園』との違い」について説明している。次に P.6 では、第 3 節「義務教育学校の意義」について記しており、中教審の平成 26 年の成果と課題が示されている。これについては、10 年経過した現在の成果と課題についても検証が必要である。授業指導案の段階で気づいた課題や成果を改めて整理し、現在の成果と課題を見直すことも必要ではないか。また、これまでの小・中一貫教育の成果はあるものの、義務教育学校の課題はまだ整理されていないと認識している。小・中一貫教育の課題を超えるような義務教育学校の立場を示すことも重要である。成果と課題をうまくつなげることが求められるため再度検討いただきたい。また、10 年経過することで形式的なマンネリ化が避けられないが、それに気づいて向き合うことが肝要。研究会の立場としては、成果と課題の部分にて言及することが可能なのではないか。続いて、P.7 から P.10 までの内容についても、9 年間を通じた対応の必要性和高まりについても触れており、このあたりの記載についても、コメントがあれば研究員の皆様から頂戴したい。
- 貝ノ瀬所長：P.7 に、平成 26 年度に明らかとなった実務的な課題が記載されている。これは全国的な課題でもあるが、具体的に教員の勤務などに関わる内容が示されている。この課題について一定の解決や改善がされていることを示す必要があり、具体的な取組の方向性を示したほうが良いと考える。
 - 天笠座長：平成 26 年の中教審答申から 10 年が経過しており、働き方改革など様々な方針が打ち出されている。時間的な経過を認識しつつ、課題と成果を再検証し、いかにして現状の課題と向き合うのか再度検討いただきたい。
 - 富士道研究員：課題については、当時出されていたものの中で、様々なケースを読むと多くの工夫がなされて改善されている点が多い。10 年間の経緯の中で、様々な工夫をしながら改善してきた点も併せて含めるべきである。全てが大きな課題ではなく、一部は改善されつつあることを示すことで、課題の解決に繋がると考える。
 - 貝ノ瀬所長：コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育の旗印として、コミュニティ・スクールの役割を記載することも一案である。これまでも、コミュニティ・スクール委員会にて、共通認識の醸成や ICT 利活用等、様々な

テーマが課題として取り上げられ、解決が図られてきたことを示すことができる
と良い。

- 二宮研究員：答申後の大きな課題として教員不足が深刻化していることが挙げられる。義務教育学校の強みとして、教職員組織のマネジメントを変えることで効率的な運営が可能になる。実際に品川区にてストレスチェックを実施したところ、全国平均よりもストレスが低い結果となった。また、コミュニティ・スクールの強みとして、地域との連携が挙げられ、地域の愛着度が高まることで効果的な運営が期待される。

○ 天笠座長：人的資源の活用が重要であり、小学校と中学校それぞれが独自に関わることが問われている。

- 倉田研究員：小・中一貫教育の課題を解決するために義務教育学校が導入されるが、それが本当に解決策となるのか疑問を持つ保護者がいるのではないか。先行事例を参考にしながら、三鷹市においても義務教育学校の制度を見直す必要があるのではないか。そうした従来の義務教育学校の状況も踏まえ、三鷹市の義務教育学校はアップデートをかけていると伝えられると良い。また、教員不足や不登校の問題も深刻化しており、特に不登校の理由が当時と異なってきている。義務教育学校の制度が不登校問題にどのように対応でき得るかを示す1文があると良い。

○ 天笠座長：具体的に概要する内容を加筆できる箇所は事務局にご検討いただきたい。

- 貝ノ瀬所長：P.8の13～15行目について、「高まり」との記載が多いことから、読みやすい文章に修正いただきたい。

（「第2 なぜ、今、三鷹市において義務教育学校なのか」に関するコメント）

- 天笠座長：続いて、第2章について、コメントをいただきたい。P.11では、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育が三鷹市における重要な要素であると述べられている。P.12ではこれまでの取組の経過が記載され、P.13ではその成果が示されている。P.13の21行目からは今後の課題が整理され、P.14では、なぜ、今、義務教育学校が必要なのかについて説明されている。P.11からP.16の部分で、気になる点等あればコメント頂きたい。
- 富士道研究員：報告書の読み手は誰にあたるのか。報告書を誰に読ませるかが重要であり、地域住民を読み手として想定している場合、P.15の「ガバナンスの効率性」という

ワードは聞きなじみがないのではないかと。可能な限り理解しやすい表現にするための工夫が必要である。

- 貝ノ瀬所長：同じく読み手を地域住民とした場合に、P.15 ページの 1 行目から 10 行目までに記されているこれからの教育の在り方について、特に非認知能力を含む「人間力」「社会力」の部分に注釈が必要なのではないか。非認知能力は非常に重要な問題であり、認知能力との違いを示すことが望ましい。
- 天笠座長：14 ページから 15 ページにかけての (1) (2) (3) の解説について、
「(3) 国立天文台周辺のまちづくり」を (1) に変更し、「(1) 三鷹の小・中一貫教育の更なる進化の契機」を (2)、「(2) 三鷹の目指す教育の先導」を (3) に変更すると、流れが良くなるのではないかと。次の第 3 章が本体であり、新おおさわ学園について扱うため、(3) を先に記載することで次の章への繋がりが良くなるのではないかと。また、第 1 章・第 2 章はイントロダクションとして位置づけ、第 3 章が本体の位置づけとするのが良いと考える
- 事務局（三鷹市教育委員会 松永教育長）：P.13 にて今後の課題を記載しているが、教育現場にいらっしゃる青木研究員から、記載内容の妥当性について伺いたい。
 - 青木研究員：コロナ禍で人間関係が希薄になっていることが課題である。これを解決するために、学園では子どもたちの交流を促進しており、小学校から中学校への進学率が 8 割を超えた。三鷹市の地域学習の中で非認知能力を育むことができるかと考える。一方で、中学校から小学校までの距離が 10 分以上かかっているので、この点が改善されると良い。さらに、時程の変更を行い、来年度からは 3 時過ぎにはすべての活動を終えて部活動や自分の仕事ができるようにすることで、業務を効率的に進められるようになると考えている。加えて、不登校の要因として、「勉強がわからないこと」が多く挙げられることから、サポートルームでの別室指導を通じて勉強を教えるようにしている。結果的に、不登校率が下がっている状況。小学校の指導方法を中学校に取り入れることで、様々な面で課題を解決し、プラスになると考える。
- 天笠座長：P14 の 11 行目以降「取組の減衰である」という文言は何を指しているのか。読み手に分かりやすいように文言を修正いただきたい。

（「第 3 『新おおさわ学園』（仮称）の目指すべき方向性」に関するコメント）

- 天笠座長：第3章について、コメントがあればお伺いしたい。P.17 ページには「4つの学びの視点」が記されており、P.18 から P.19 には具体的な取組が示されている。「地域と連携した学び」、「9年間を通じた学び」、「多様な他者との学び」と続き、P.25 にはさらに具体的な取組が記載されている。P.27 までの範囲をご確認いただきたい。

- 富士道研究員：P.19 のイメージ図がわかりやすい。一方で、P.22 に子どもたちの学力についても言及されていることから、基礎・基本を大切にすることを強調する文言を追加しても良いのではないか。また、P.26 の4行目、ピラミッド型組織とフラット型組織についても、関係性を図示し、脚注をつけることでよりわかりやすくなるのではないか。全体的にわかりにくい表現となっていないか、今一度ご確認ください。

- 二宮研究員：P.19 ページの図表がわかりやすい一方で、義務教育学校の具体的な説明については加筆が必要である。特に、保護者や地域住民に対して、義務教育学校が一般的な小学校や中学校といかに異なるのかを具体的に説明することが重要。また、コミュニティ・スクールの強みを活かし、地域と連携した学びを9年間続けることで、地域の教育力が向上すると認識しており、そうした点も追記できると良いのではないか。教員は在籍できる上限である6年しか見届けられないが、その後は地域が引き継いでいくというイメージが、地域住民との共通認識として共有できると良い。さらに、多様な他者との学びは大きな意味を持ち、子どもたちが将来の姿を見据え、自己確立に繋がる。教職員集団が9年間の義務教育を考えながら教育活動を行うことで、教育環境が向上し、学力も自然に高まる。探究的な学びについても、各教科横断的に広がるのか、9年間の縦の繋がりで広がるのかを考える必要があるのではないか。

- 天笠座長：これまでの研究会でも「義務教育の質の向上」という言葉が出てきた。新おおさわ学園の目指すところも、学力の向上や義務教育の質の向上なのではないか。全体として、現行の義務教育の質を向上させることが大目標として存在しており、各論として具体的な取組があるといった位置づけで記載できると良いのではないか。

- 貝ノ瀬所長：P.19 のイメージ図は、9年間を通じた学力向上や義務教育の質の向上について図示していると理解しているが、集束していく図が息苦しい印象を与えている。むしろ拡散し、広がっていくような「人間力」と「社会力」が育成されていく過程が分かるイメージ図にアップデートいただきたい。また、P.20 の16行目に書かれている学校

3 部制と連動した探究的な学びや放課後の時間を重視することが、三鷹市の義務教育学校の目標に繋がると考えており、放課後の時間についても同イメージ図内に統一した表現が必要なのではないか。加えて、P.21 までのページにて、アントレプレナーシップ教育や SDGs などの取組についても言及されているが、これらの内容については同章の前段落に移動させても良いのではないか。

- 天笠座長：P.22 の発達段階に応じた成長の設計について、16 行目から教科担任制の案が示されている。第 1、2 学年は学級担任制、第 3、4 学年が一部教科担任制であり、第 5 学年以降が完全教科担任制となっている。三鷹市の現状では、おおさわ学園だけでなく、多くの学園で本指導体制が採用されているのか。

- 事務局（三鷹市教育委員会 福島指導課長）：学校規模にもよるが、第 3、4 学年でも一部教科担任制を進めている学校は存在している。第 5、6 学年については、英語専科も入っているケースも見受けられる。

- 事務局（三鷹市教育委員会 齋藤指導課教育施策担当課長）：現在のところ、第 5、6 学年では必ず一部教科担任制を実施しており、第 3、4 学年については学校の裁量で一部教科担任制を行うことができるようにしている。学校にはその方針に基づき対応していただいている状況。

- 天笠座長：新おおさわ学園については、どのような体制を打ち出す意図の記述なのか。

- 事務局（三鷹市教育委員会 松永教育長）：先ほど担当課より説明があったように、三鷹市の現状では第 3～6 学年において一部の教科で教科担任制を採用しているが、学級担任がほとんどを担当している状況。しかし、新おおさわ学園では基本的に中学校のようなフルの教科担任制を目指す趣旨の記述と認識。

- 天笠座長：現在説明いただいた内容を、報告書にも反映いただきたい。

- 貝ノ瀬所長：P.22 ページに記載されている教科担任制について、学年主義的な考えに基づいているように見受けられた。学年を外した学習も考慮した内容を記載することも一案である。例えば、中学生と小学生が学年を超えて課題に取り組むことができるような自由度を持たせ、三鷹市の義務教育学校の目玉することも考えられる。言い換えれば、学力の進度が異なる子どもたちが互いに理解し合い、補い合うことのできる環境とも表せる。結果的に、様々な取り組みがチャレンジできる余地を残しておくことが望まし

い。総じて、学年担任制も含めて、選択肢の一つとして考慮することが良いのではないのか。

○ 二宮研究員：教科担任制に係る議論に関連して、学力向上のために理科や社会の専門免許を持つ教員を3年生から配置することが重要。専門の中学校教員が小学校で教えることで学力が向上すると考える。教科担任制は有効であると認識しているが、実際に効果があるかどうかを確認することは必要である。

○ 天笠座長：中学校の理科の教員が小学校の高学年の理科を指導している実情はあるのか。

■ 事務局（三鷹市教育委員会 齋藤指導課教育施策担当課長）：現在のところ、三鷹市では中学校の理科教員が小学校で年間通して指導している実績はない。ただし、いくつかの小学校では理科専科教員が配置されており、今年度からは体育の専科教員の配置も進めている。

■ 天笠座長：小学校の学級担任による教科担任制については、学年内で先生方が協力し合い分担しているのが現状である。中学校の先生の専門性を小学校へ加えるためには人的措置が必要だが、現状ではそこまで進んでいない認識。義務教育学校は、9年間を通じて小学校と中学校の先生の持っているものを生かすことができる点が特徴的である。学びの広がりに加えて、教科担任制が、教員の働き方改革に強く影響しており、組織として教科担任制の趣旨を押さえることが重要である。

● 天笠座長：デジタル教育やICTに関する記述が所々出てくるが、まとまった記述がないと見受けた。新おおさわ学園としてのデジタル構想の有無について確認したい。

○ 事務局（三鷹市教育委員会 齋藤指導課教育施策担当課長）：国全体の方針であるGIGAスクールやネクストGIGAの内容に基づき、1人1台のタブレットを進めている。しかし、新おおさわ学園のハード整備に関しては、詳細はまだ先である。個人的には最先端の技術を導入したいと考えており、3Dプリンター等の最新機器を取り入れることで、子どもたちが時代の最先端に触れられる環境を提供できると良い。また、新おおさわ学園の立地は自然が豊かであり、最先端の技術と自然の両方を活かした教育環境を目指していければよいと考えている。

○ 天笠座長：日本では、デジタル人材不足が深刻化しており、大学教育において体制を整えて始めていると認識。しかし、高等学校や義務教育学校におけるデジタ

ル化についても考慮する必要があるのではないか。新しい物品を導入することも重要だが、教育課程としての問題意識を持つことがより重要である。また、理系と文系の分け方が20世紀的であり、それを越えた教育のあり方を記すことも重要である。デジタル化や情報に対する向き合い方についても、教育課程の一環として考えるべきではないか。

- 貝ノ瀬所長：P.24の29行目あたりで触れられている内容を膨らませて記載するのが良いのではないか。
- 倉田研究員：学校や公共施設には既にある程度デジタル機器が揃っているが、それをいかに活用して授業を行うかが重要である。現状各学校内には、デジタル機器の使用が得意な教員とそうでない教員がおり、ICT支援員が来た際に引っ張りだこになっている状況を目にしたことがある。教科担任制の話題にも関連するが、専門人材を配置することで、教員たちがデジタル機器を活用して授業を組み立てる発想が生まれるのではないか。
- 天笠座長：今回の学習指導要領においても、これらのデジタル教育をはじめとした内容がいかに記載されていくかは注目すべきポイントである。それに先立ち、本報告書では、P.24の記載内容を加筆していただきたい。
- 貝ノ瀬所長：デジタル分野が国策として重視されるべきであり、報告書においてもある程度項目を立てることが重要である。
- 天笠座長：学校の空間においては、デジタルとリアルが融合した世界を作ることが重要。新しい機材を導入するだけでなく、体験学習等を行うことが重要。

（「第4 他の学園への成果の波及」「おわりに」に関するコメント）

- 天笠座長：「第4 他の学園への成果の波及」または「おわりに」についてもコメントを頂戴したい。三鷹市の学園に対してもさることながら、他の自治体にて検討している学校にも成果を波及させていきたい。
- 富士道研究員：本報告書に係る今度の公表スケジュールについて確認したい。
 - 事務局（三鷹市教育委員会 越教育政策推進室長）：この報告書の公表後に、まずは教育委員会としての方針を作成し、公開の場である教育委員会の会議の中で議論していただく予定。そのうえで、来年度以降の国立天文台周辺地域土地利用整備計画などに反映する想定である。学校としての教育課程の検討も順次進めて

いく予定であり、コミュニティ・スクールとして地域の方々と協力しながら、具体化に向けた協議を進めていく。

- 富士道研究員：地域の意見を取り入れながら進めていくことが重要。特に地域というキーワードが出ているため、地域の方々の意見をしっかりと聞きながら進めていくことが必要である。一生懸命進めても、後ろを振り返ったときに誰もついてきていないという状況は避けなければならない。地域の方々の意見を取り入れながら、具体的な取組を徹底して進めていくことを期待している。
- 天笠座長：義務教育学校の特例を活用することがポイントであるが、現状では十分に活用できていない。市町村ごとに事情が異なり、新しい取組が遅れているのが現状である。これを他の市町村にも波及させる必要がある。「第3 新おおさわ学園の目指すべき方向性」についても、精査が必要であり、次の学習指導要領の改訂に関する情報も考慮し、全体を構築することが重要である。

研究会後に向けたコメントなど

- 事務局（三鷹市教育委員会 齋藤指導課教育施策担当課長）：委員の皆様からのご指導ご助言に感謝している。天笠先生が指摘した特例の活用不足についても、さらなる可能性を模索していきたい。
- 事務局（三鷹市教育委員会 福島指導課長）：他の6学園の教職員が新おおさわ学園と共に進んでいなければ、三鷹全体の教育が前進しない。指導課としては、おおさわ学園のチャレンジが全体の教育を前進させるように取り組んでいきたい。
- 事務局（三鷹市教育委員会 齋藤教育部調整担当部長）：これまでのご意見に感謝している。本日も宿題をいただき、これからまとめていくが、これまでの議論を踏まえ、行政として今後検討し、新しい学校をつくっていきたいと考えている。
- 富士道研究員：これまでの議論は、子どもたちのためであり、最終的には子どもたちに還元することを忘れないようにしていきたい。今後も継続して具体的な成果を作り上げ、将来的には学校をブラッシュアップして地域に提供していけると良い。三鷹市がフラッグシップとなり、三鷹市に住みたいとなると良い。
- 二宮研究員：今回の参加が大変勉強になり感謝している。自身のところでも様々な取組を行っているが、制度化されるまでに時間がかかり、継続が難しいと感じていた。今回

の議論を自身の学園にも持ち帰りたい。新しい学園ができたら、スクール・コミュニティとして街全体がどのように変化するか、期待している。

- 倉田研究員：学園について多くの方が話してくださることにわくわくしている。貝ノ瀬所長がおっしゃるように、本研究会での議論を地元を持ち帰り、コミュニティ・スクールの中でも検討を進めたい。コミュニティ・スクールを再活性化するタイミングだと感じており、地域の人として、子どもたちにとって良い学校をつくっていく過程を見届けたい。
- 青木研究員：今回の勉強会で子どもたち一人ひとりの幸せのために良い学校をつくることが重要であると感じた。また、学校を通じて地域が活性化するような学校づくりを目指したく、今後も検討を続けていきたい。
- 事務局（三鷹市教育委員会 星野学務課教育支援担当課長）：教育支援を中心に業務を行ってきた中で、今回の研究会で三鷹の現状を話す機会を得たことに感謝している。これまでの経験や知識を基に業務を行ってきたが、今回の研究会で改めて自分の業務の重要性を感じた。教育支援の課題についても自分の中で整理でき、研究会でも議論があった通常の学級と支援学級の教員の授業交流は、今後重要であることを再確認した。義務教育学校ができれば、この交流を円滑に行うことができ、教育支援の必要な子どもたちに個別最適な支援が提供できると感じている。
- 事務局（三鷹市教育委員会 松永教育長）：1年間のご議論に感謝している。最も重要なのは、義務教育学校制度を活用してどのような教育を行うかを明確に説明することである。この制度の良さを制度論でお伝えしても不十分である。子どもたちが学ぶことでどれだけ社会力がつき、地域を愛する子どもに育つかを示すことが求められる。義務教育学校は手段であり、目的ではないことを再認識しながら進めていきたい。
- 貝ノ瀬所長：小・中一貫教育の見直しを行い、課題と成果を洗い出しながら改善を図ってきた。本研究会を通じて、義務教育学校のメリットを明確に整理していただいた。課題と成果を乗り越え、義務教育学校の必要性を理解し、啓発することが重要である。コミュニティ・スクールとしての取組を進め、新しい義務教育学校の存在を具体化させ、広く発信することで、理解が広がると考えている。報告書は、さらに精査が必要だが、一般の方にも理解しやすい内容になっていると感じている。
- 本岡アドバイザー代理：専門的かつ現場に根差した貴重な意見に感謝している。3点コメントする。まず、1点目が、読みやすい表現や文書の対象を考えることの重要性であ

る。小・中一貫教育については平成 26 年の答申から新たな課題や成果が見えてきたため、今後の方向性を検討する必要がある。「中 1 ギャップ」を解消し、義務教育 9 年間を通じた対応が求められていることから、継続的な検討を進めていただきたい。2 点目が、義務教育学校は、目的ではなく、三鷹らしい教育を実現するための手段であるという点である。日常的に児童・生徒と教員が多様な機会を受けられることや、教員の連携が児童・生徒の情報交換や指導方法の改善に繋がるのが、義務教育学校における優位性であると理解した。3 点目が、探究的な学びの部分では、特例を活用して科目を創設し、主体的に学び続ける手法を体系的に学ぶことが重要であるという点である。学習スタイルに関する調査結果を踏まえ、新しいカリキュラムの編成が求められていることから、引き続き意見交換等も実施しながらブラッシュアップしていただきたい。最後に、学習スタイルに関して少し紹介する。令和 5 年 12 月に義務教育に関する意識調査を行い、全国の児童・生徒にどのような学習スタイルが好きかを尋ねた。この調査によると、小学校の 4～6 年生までは友達と一緒に勉強したいという割合が高いが、中学校に入るとその割合が減少する。また、同じ課題で学びたいという意欲も、小学校 6 年生までは低い割合だが、中学校に進むと増加する。探究的な学びを進めるにあたっては、様々な施策が考えられる。子どもたちの状況に応じて、新しいカリキュラムの編成をしていただけると大変ありがたい。もし法制的に不明点あれば連絡いただきたい。

- 天笠座長：新しい教育の実現に向けて義務教育学校の枠にとらわれずに取り組んでいくことが重要であるとのコメントや、現時点で特例を十分活用できていないというご指摘、さらに、ゆくゆくは特例ではなく制度の修繕に繋げていくというお話もあった。ある教育長から聞いたところでは、「学校で当たり前と思っていることを見直したら、教育の質が非常に向上した」というお話もある。学習指導要領の改訂とともに、学校のあり方も考えていければと思っており、検討を進めて参りたい。素晴らしい教育の実現に向けて、もし法制的に何か疑問等あれば、関係各所にもご連絡いただければと思う。皆様におかれても、新しい教育の実現に向けて検討を進めていただければ幸いである。

2. 事務連絡（今後の最終版報告書完成までの流れ）

- 天笠座長：これまでのご議論に感謝する。本日いただいた意見を事務局にて反映させる想定。報告書内容確定までのプロセスについて必要に応じて研究員の皆様に報告・相談させていただくが、座長一任で進めても問題ないか。

- 全員：問題ない。
- 天笠座長：座長一任で進める。
- 天笠座長：事務局と詰めていきたい。これまでのご協力に感謝する。
- 事務局（三鷹市教育委員会 松永教育長）：三鷹の国立天文台周辺まちづくりに関連した新おおさわ学園の検討は、非常に夢のあるものであり、子どもたちにとってより良い教育となるよう進めていきたいと考えている。専門的な方々から多くの意見をいただき、研究会から三鷹市教育委員会への提言として報告書をまとめていただいた。これを基に教育委員会として今後の教育プランを策定し、進めていく意向である。研究員の皆様の思いを受け止め、より良い学校づくりに取り組んでいきたい。1年間のご議論に感謝している。